
Allegro Rhapsody

香栄きーあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Allegro Rhapsody

【Nコード】

N2120U

【作者名】

香米きーあ

【あらすじ】

ひたすらに白く美しい、故に赤く染まる操る裏の青年と、雑技団で懸命に働く表の少女。二人は出会い、そうして駆け抜けるように紡がれる、彼らと、それを取り巻く人々の狂詩曲^{ラフソディ}。能力者と呼ばれる人間達が織り成す、現代ベース・バトルファンタジー

プロローグ

赤い空

消え逝く太陽

終わる日常

そして始まる

漆黒の夜

*

『春一番、AWAの舞台の幕開けだっ！！』

張りのある少女の声。

同時に聞こえた笛の音は夜の暗さを跳ね返す陽気さで鳴り響き、人々の注目もより強くなっていく。

『新たな舞台は特別仕様！！？アレグロ・ラプソディ？の第一夜・スケルツォ！！難しいことはいいっこナシで、唄って踊る、夢舞台だよ！！！』

周りの楽器持ちが奏でる明るい音色に合わせ、楽しそうに口上を述べる少女。その首には動きに合わせてシャラリと揺れる、赤い宝石。

*

*

月明かりは夜空を覆う薄雲を白く照らすばかりで、地上にはほとんど落ちてこない。並んで建つ家々の影がしつかりと延び、道は酷い。

そんな色鮮やかなネオンが溢れる大通りの裏側に、二つの影があった。

僅かな明かりに照らされる小柄な影は淡い色の巻き毛少女。首に下がった宝石が僅かに揺れた。

腕の先にいた影が僅かに動き、次に月明かりの下へと現れたのは若い男である。

淡く照らされた男は丈の長いコートから靴に至るまで、纏うもの全てが銀にも見える白色で揃えられている。僅かな風になびく長い髪までもが、図ったように同じ色をしていた。

唯一、首に下げる赤い石　宝石の欠片のような歪な形をしたそれがそんな白づくめの中で異彩を放っていた。

黒く涼やかな目に、形良く通った鼻梁。そして柔らかい笑みを作る唇は、僅かに落ちる明かりの中でさえわかるほど、際立つ美しさを持った男だ。

その笑みに引き寄せられるように伸びた少女の手を取り、男は己の頬へと当てた。

両者の影が重なる間際　　突如少女の影がゆらりと消え、地に落ちた。

男が握っていた手を離すと、鈍い音と共に少女は歪に捻じれた形で倒れたきり、もうぴくりとも動かない。

僅かな明かりの中に見える虚ろな瞳は動かず、胸の中央からこぼれ出す血の動きだけが窺える。

前に立つ男の手には、刀身を淡く輝かせる刀が握られており、その刀を　長身である男の背ほどもある長い刀だ　振り血を払うと、仰向けに倒れた少女の首元で垂れているネックレスを刀の背で持ち上げる。

そうして一息に刀身を返し、細やかに連なっていた鎖を断ち切った。トップに付いていた宝石が宙に舞う。その石を手に納めると、男は薄く笑った。

「キース」

「……やあ、クディ」

現れたのは白い男　キースと対をなすように、黒髪に漆黒のスイツとサングラスという出で立ちの男。

悪戯が見つかったような声音で笑い、漆黒の男を見た。

「仕事はいいのかい？」

「……余計な騒ぎは起こすな、といったつもりだが」

「くく、やだなあちゃんと片付けるよ。違反にならないだろ？」

笑いながら事切れたモノに近づき、キースの手がそれに触れると。

死体が消えた。

残るのは赤黒く変色した血たまりだけだ。

「今頃下水道流れているかな？」

明るい調子で言うキースに視線を投げる男は、その不可解な現象を見ても男の楽しげな声を聞いても、雰囲気を変えない。

表情こそ見えないが、夜の闇のような予想のつかぬ静けさを持つたまま口を開く。

「今回は些細ないざこざで警察を呼ばれたらやっかいだ、とも言っておいたはずだ。次に勝手な行動をとれば容赦はしない」

「対“能力者”なんて滅多に動けないって、この前自分で言っていたらクデイ」

「黙れ。俺の意思には逆らうなと言ったはずだ」

静かに、だが先ほどより鋭い声。

クデイと呼ばれた漆黒の男はそれだけ言つと、踵を返した。

建物の間を血臭の混じった風が走る。

キースはそれを心地よいと笑むと、思い出したようにネオンの街へと視線を移した。

『今度の舞台はスケルツォだよー！！歌って騒いで楽しめる、A W Aの舞台だ！！』

賑やかな音楽が遠くに聞こえ、キースの笑みがより深まる。

「そう怖い声出すなよ。僕がヘマすると思うかい？ これは、予行練習」

くつくつと笑い、手の中にある、血に染まりほぼ黒く変色した石に唇を寄せる男。

その様子に、クデイは僅かなため息をついた。

「赤の石？ズルワン？。持ち主は16歳の女の子。退屈しないといけどねえ？」

くつく、と喉で笑うキースに、呆れた、と言う代わりにクデイは無言で歩きだした。

「ああ本当に楽しみだよ。早く会いたいねえ……ロードレイン」

変色した赤黒い宝石へ口づけを落とし、血だまりへ落とす。

僅かな明かりで鈍く光を返すそれを僅かに見つめ、キースとクデイは路地の奥へと姿を消した。

？ ？：灰色の足音

少年は約束の場所にいた。

そこは酷く暗い場所で、コンクリートで覆われた地面にいく本もの鉄骨がむき出しに突き刺さり、合間を走る風が時折悲鳴のような音をたてる。何かの跡地か、建設途中で放棄された場所か。周りに灯りになる物はない。少年はもう暗闇を恐れる年ではないのだが、酷く寂しい風景。そんな心細くさせる場所。灯りは持ってこないように言われていたためか、珍しくそんな心持ちだった。

それでも少年はじつと暗闇に紛れるように佇み、約束の相手を待っていた。

「やあ、お待たせしました」

「！」

「初めまして。少々都合がありました、このままで失礼しますね」
風と、土と鉄の臭いしかなかった場所に、突如現れた気配。
どこにも姿はない、しかし確かにそこにいる。

人、というには余りにも希薄な気配に、少年は不安と安堵を折りませながら、答えた。

「お初にお目にかかります、俺は……」

「聞いていますよ。急で申し訳ないのですが、本題です」

どこまでも柔らかな低い声に遮られ、下で何か硬いものが落ちる音がした。

そして足下へぼう、と蠟燭の明かりが灯ると、僅かに視界が開ける。

灯りの元にあるのは、紅い石……

「……これは？」

「君は触れてはいけませんよ。少しでも邪心じやしんがあるものはたちまち食われてしまいますからね。これは大切な石。我らの未来を担う石です」

「……」

「あなたの役目はこれと、これを持つ少女を見張ることです」

「見張り……ですか？」

少年が声の方へ顔をむける。しかし明かりが小さく、相手の顔は見えない。

僅かなとまどいを見せる少年の顔が見えているのだろうか、相手から微かな笑い声が聞こえた。

だが少年は 逆に、暖かく優しいその声音を聞いたびに、どこか背筋が冷えて行くのを感じる。

「ええ。しかし、見張りといえど貴方はこの持ち主と仲の良い存在にならねばなりません」

「つまり……信用、ですか？」

「そうです。貴方は、少女も含め誰にも本当の貴方をばらしてはいけませんよ」

優しい声が少年を包む。

だが、少年は気づいていた。己が先ほどから感じるその感情が恐怖であることを。

これほど恐ろしく……そして全てを包み込むような慈愛が、その声には溢れていた。

声の主はそれに気づいているのか、ことさら柔らかく、優しい声音で囁くように言い足した。

「いいですね？内緒ですよ……ヴァッツ」

そうして6年前。

少年は一つの渦の中へと放り込まれていった。

アンバル公国の首都・ウェブストック。

国内有数のサーカス団として名高いAWAの拠点施設がある街。AWAはまだ小さい一雑技団だったころから世界を巡り、名を売ってきた実力派である。

スポンサーは有数あれど、拠点らしい拠点をもたなかったが、前年に是非にとこわれ、この場所に拠点となる専属の舞台を設営したのだ。

そして今夜はAWAによる、実に1年ぶりの新作『Allegrorhapsody』の公開初日。

旅のテントをイメージしてつくられた専用劇場の入口は、開演を待つ人々で溢れ、さらに祝う花や飾りで賑やかに彩られ覆われている。

その門を潜り、手前の小さい天幕へと足を進めれば、そこには花々を描いた煌びやかな布で覆われた壁、天井から釣り下がった明かりもどこか東方の民族のを思わせる飾りが施され、異国風の色合いに染め上げられていた。

土産物を売る場所や、演目紹介の簡易ビデオが流れる近代的で、現実味がある一角を有しながらも不思議と違和感なく溶け込んでいる、見事な内装である。

そしてメイン会場　通路を抜けた奥の大きなテントへとはいれば、そこはもはや別世界。

円形のステージを覆う巨大な垂れ幕には東洋の宮殿が描かれ、また一方にはその豪華な建物の広間で音を奏でているであろう楽師の姿が描かれている。

それに合わせて踊る人々や、おそらくその人々の歌につられて降りてきたのだろう神々も併せて描かれており、その上から光る飾りやチェーン、造花で飾られキラキラと輝いていた。

どれもこれもが賑やかで、始まる前から席を埋める観客たちを楽しませた。

開演まであと三十分。

入場が始まった今、観客の期待は大いに高まっていった。

*

会場入口や場内とはまた違った、しかしがやがやと絶え間ない人の声と、物をあさる音。

A W Aのテント、その舞台裏である。

「おおい、ヴァッツを知らねーか」

「え、今そっち帰ったと思うけどー」

「小道具が割れちまってな。予備をどこへしまったか探してんだが……こっちにはいねーよ」

「あ、ぼく見たよ！ 裏に行ってたけど」

「お、本当かネル」

物陰からひよいと顔を出し、裏方の男たちへと笑顔で告げる少女。前下がりカットされた黒髪全体に金粉を散りばめ、長めに残してあるサイドの片方には筒状の飾りをつけ纏められている。

さらに太陽を模した飾りのついた大ぶりの髪留めが、黒い髪によく映えていた。

猫のようにまん丸なつり目は勝気そうに輝き、舞台映えするよう厚めに施された化粧によって幾分残る幼さが中和されている。露出の多い踊り子の衣装に身を包んだ姿は、中々かわいらしい。

首元につけた光を浴びて輝く大ぶりの紅い宝石が、良く似合っていた。

「うん、ぼく手空いてるから、探してくるよっ！ どうせもう直ぐ円陣組む時間だしな」

「ああ……じゃあ悪いけど頼む。サンキューネル」

屈託なく笑う少女に釣られ、頭を掻きつつよろしく頼むよと手を

降った。

楽屋裏を後に、ネルは裏口から外へ出た。

五分ほど前に同じ出口からヴァッツ AWAの舞台セット担当をしている青年が出て行くのをみたからだ。

きよろきよろと視線を巡らせて見るも、そこに探し人の姿はなく、
「おや？」とネルは首を傾げた。裏口を出てすぐの場所には舞台に使う道具や手直し用の工具が入れてある小さな倉庫がある。てっきりそこにいると思っていたネルはアテが外れてしばし考え込んだ。

「んー……大きいほうの倉庫かな。車かな……」

とにかく見つけられないとな、と拳を握り締めてネルは倉庫へと歩きます。

すると、さほど距離を歩く前に聞きなれた声がした。

「話が違いますっ」

「！」

「それじゃあ、約束とまったく違う……俺は、どうしたらいいんですか！？」

ヴァッツ 声の主である彼は、二十歳を超えた青年で、割と控えめで温厚な男だ。昔受けたケガのせいで舞台に立つことはないが、AWAの大道具を引き受けている。

そんな彼が声を荒らげたことはほとんどない。驚いて足を止めたネルだが、このまま登場するのもどうかと思い、ネルはテント脇からそつとのぞき込む。

そこにはヴァッツと、こちらに背を向けたもう一人。
見覚えのないフードを被ったその人に、ヴァッツは何かを訴えている最中らしい。

一体どうしたんだと身を乗り出そうにも、これ以上行けば見つかってしまうし、だがいかなければ声を拾うことは出来ない。

どうしたものかと考えていると

「なにしてんの、ネルちゃん」

「うわ、あ、……あはは」

気づけば目の前にヴァッツ。

少しウェーブが掛かった髪を後ろでひとつに纏め、印象的な青い目に浅黒い肌。

裏方とはいえよく鍛えられた体軀を目の前に、少しの罪悪感も相まって縮まるネル。

「なんだい、覗き？」

「あ……と。ごめんなさい」

「いや、いいんだけど……何か、聞こえた？」

「ん？んー、何も。ヴァッツが珍しく慌ててるくらいしか……」

特に何も聞こえなかった。ただの喧嘩や意見の食い違いかと思っただが、今彼の額に滲む尋常ではない汗が、それだけではないと言っているようで気になった。

「大丈夫か？ 具合悪いなら早く救護テントに」

「大丈夫。ありがとう、ネル」

「あ、ああ……大丈夫ならいいんだけど。あ、トム達が道具が壊れたとかで、探してたぞ？」

「わかった、すぐ行くからって伝えておいてくれるかな」

任せる！ と元気よく笑ってヴァッツに背を向けた。

それを確認し、ヴァッツが背後から何かを取り出した。無論ネルは気づかず、鼻歌まじりにテントへともどっていく。

そのネルの背中に狙いを定め、鈍く光を移すそれを振り上げようとした、瞬間。

「あのう……すみません」

後ろで声がして それもヴァッツではない 思わず振り向くネル。それはヴァッツも同じだったようで、驚いた顔で振り返って

いた。

だが、なんのことはない。そこにいたのは暗いグリーンの作業着を着た男。深く帽子を被ってメガネを掛けている、やや小柄な中年だ。

「AWA関係の方……ですよね？」

「ああ 申し訳ない、どなたですか」

先ほど取り出したものを素早くしまい込んだヴァッツと、その横へ戻ってきたネル。

その問いかけに作業服の男は慌てたように挨拶をし、作業員証のカードを見せてきた。

「え、ああ電気屋さんかあ」

「はいファイントといえます。不要機材の引き取りにきたんですが、なにぶん広いもので……B-? テントはどちらになりますか？」

「ああなんだ。それならぼくが案内するよっ……あ、ごめんヴァッツ、先行ってて！」

助かります、とまた頭を下げる男とそれに笑顔で話しかけるネル。

それを静かに見送るヴァッツは、どこか焦った表情で自分の右腕を抑えていた。

？　？：煌びやかな予兆

街並みにも明かりが灯り始める時間帯。

会場入口にある、太陽を模したAWAのロゴが美しい光を灯していた。

会場は満員御礼、売り子が練り歩き、各々騒めく客席はまくがあくのを心待ちにしている。

その中で、西側の客席からわつと歓声が上がった。

花の入った籠を手にした少女を先頭にして前座の催しが始まったらしい。

奇抜なメイクの道化がお客様の帽子をひよいと取り上げ被ってみたり、恰幅のいいシルクハットの男が酒ビンを手には客席を動き回っている。そのシルクハットの男がふらふらとお客様の間に倒れこんでみたかと思えば階段をころりと落ちてみせ、それをあわてて支えようとして重さに耐えられず、下敷きになって騒ぐ男も笑いを誘った。

わずかに開けた場所に立つと、手にしたビンを一気におろし：豪快な炎を噴いた！

その妙技にわつと客席が沸き、開演前だというのに大きな拍手と歓声巻き起こる。

そんな炎が消えた頃。

会場の明かりがふわりと落ちて、間をあけず柔らかな音楽が流れ出す。

そしてぼんやりと照らしだされた半円型のステージの端には人の姿ゆったりとした布地を幾重にも重ねた異国の衣装。おそらく東方の

砂漠の民を思わせるものだ。布を幾重にも巻いた頭飾りをして、整った顔立ちに派手な化粧。

手にはあまり知られていない弦楽器。胴は丸く、抑える柄は長細い。弦は二本と少ないそれを器用に爪弾く。

一見ただけでは男か女の判別がつかないその人物が、指輪や腕の飾りできらきらと光が零れる指先で柔らかく奏でる音と、ゆるやかに歌うのは同じく耳に心地よいアルトの歌詞のない音。

高く低く奏でられる声と音、併せて淡い光がいく筋もステージや男を照らす。

幻想的　　そう息を呑む音が会場を包む。

そしてそこへ、新たに笛の音が重なった。

はっとしたようにステージの、歌う人物とは逆を見れば同じく異国の衣装を着込んだまだいくぶん幼く見える少年が座り、歌声に合わせて笛を奏でる。

ステージの両サイドに座る二人の奏でる音色に見惚れる視線と、期待を込めたきらきらした視線が集まっていく。

シャラン！

軽い鈴の音と共に、一切の音楽が止む。

誰もが鈴の音のありかと、演奏をやめたステージの2人を見つめていると、さらにまた鈴の音。

その鈴に連動するように段々と強く、煌めいていく明かり。

次第に光に包まれるステージに、会場の気体がピークに達したとき

ステージ脇の2人が纏っていた布飾りをやや芝居ががかって脱ぎ捨てる。

同時、会場が光と音の洪水に包まれた！

光と同時に、歌い手の背後、重く閉じられていた幕が開かれる。

そこには笛やバイオリン、タンバリンに太鼓を叩く道化。先ほどの重い衣装を脱ぎ捨てた、煌く飾りを纏う二人の楽師も加わり、さらに華やかに。

合わせて心躍らせる鈴の音を奏でるのは、いつのまにか客席に散らばった無数の踊り子たちによるもので、手足身体につけたカラフルな鈴が纏う布地の閃きと相まって美しい。

最初歌っていた男が楽器を一際高く鳴らし歌いだす。

さあ！ 今宵開くは春世の宴、グラスは綺麗に磨いておいた燭台には十二と一つの灯、テーブルクロスに並べるは前菜、ワインに甘いお菓子、ナイフとフォークは純銀にしてお前のためのもてなしだ、さんざん笑って喰わせてやろう

さあさ、開くは最初の宴、観ているだけでは退屈だろうそこに居座る友たちも、早くそこから降りてこいさあさお楽しみはこれから、これから

今宵の宴はスケルツォ、騒いでこそその協演を声高らかに歌い上げるアレグロ・ラプソディが今開かれた！

開演直後の神秘的な声とはまた違う高さの響く声で、不思議な旋律を歌い上げた。

そして、一瞬で全ての音と光が消える。

間をあけず、再びついた明かり。

客席に散らばっていた踊り子はどういう仕掛けか忽然と消えていた。しかし観客はそんなことには気づかない。

なにせ目の前には華やかにライトアップされ、華やかな衣装を纏い、煌く飾りのついたフラフープを持った五人の団員。

五人がフープを高く掲げると、再び奏でられる楽の音。
先ほどの歌い手が筆頭となって佇むステージ脇の一角には、いつの間にか小さな楽団が出来上がり、生の演奏と歌でもって、迫力を生み出している。

その高鳴る音色に合わせて沸き立つ客席に、団員たちは華麗な微笑を向けてまさに会場が動き出した。

*

舞台裏。

がやがやと賑わう様は開演前とさほどかわらないが、裏からも舞台が見えるよう設置されたテレビをほとんどが見上げているためか、少しばかり静かなそこ。

「ハーティ、ほら急ぎな、次は楽器だろ？」

「わかつてるよっ大丈夫間に合うってば」

「はいはい、ハーティ早く着替えてよ？」

「わかつてる！！もー、オルハもミーナもうるさいなあ！！」

文句を言いながらも次の演目の衣装へと着替える少年　見た目はネルより少女のよう　ハーティは先ほど小さな道化として会場を駆け回り、飴や造花を撒いてまわっていた。

そこへ小さな女の子があとをついて回ってしまい、撤収する時間がおくれたためにややバタバタとした着替えとなっていた。……とはいえ、まんざらでもない顔だが。

それを見送って、もう一度ぎゅっとこぶしをにぎったネルが見上げるのはステージの様子が見える画面。

別の仲間が綱渡りで決死のアクロバットを見せている。安定しない足場から指定された的へとナイフ投げをしたり、自転車にのり、さらに上に人を乗せて渡ったり。

僅かに感じる恐怖と、心地よい緊張感が入り交じり会場はえも言われぬ歓声に湧いていた。

それをきらきらとした視線で見つめるネルの出番はこの次、柔軟性を活かした踊りと天井から垂れる紐を使つてのアクロバット。

「……頑張らなくちゃ！」

「うふふ、気合入ってるわねネルちゃん」

「フラウ！」

ネルの頬をちょん、とつついて満開の笑顔で顔を出したのは団員の一人、フローティア。フラウと呼んで慕う彼女はソロでも世界的に有名な踊り手だった。

淡いピンクに染めたふわふわの髪をたつぷりの花と柔らかな布とで飾り、露出の覆いアジアンテイストの衣装。キラキラと光を取り込んで輝く繻子の布で腰周りを覆い、足首に幾重にも鈴が付けられている。

その立ち姿はとても綺麗で、ネルは共演するのにいつだって見惚れてしまう。

次の演目は彼女　フローティアとの演技。

負けてられないな！

脳裏に描くのは彼女と共にライトをいっぱいに浴びて、踊る自分の姿。

そうなる、予定だった。

彼女たちの演目に差し掛かり、舞台裏からステージへ駆け出した

その時。

思いを裏切るように、一斉に、A W A 劇場の明かりが消え　静寂が会場を包んだ。

*

A W A 会場内が一斉に停電を起こした時からほんの5分ほど前。

「りょーかい。じゃ」

賑わうAWAの会場から少し離れた場所にある街道。そのすぐ脇にある林に止まる一台の車の中。

昼間ならすぐに見つかるであろう場所にあっても、木と暗闇を見方に溶け込むようなその車は誰の目にも留まらなかった。

その中でハンドルに凭れながら話していた青年が、携帯の電源を切る。

目の端ではカーナビほどの画面に映し出される映像を追っていた。予定どおり進んでいることを確認し、画面を切った。

助手席に回りこみ、足元にある何かのスイッチを入れ、そのまま外にでて助手席からつながる何本ものコードの先へ向かった。

5mも離れていないその場所には青年の腰ほどの大きさの機材。

数本のアンテナのような棒がたち、いくつかの数字の並ぶディスプレイが鈍い光を放っている。

「配電盤、接続会社、警備システム、解除　さて、悪いことでもしますか」

くすくす笑う男がディスプレイを確認し、その機材の真横についた数本のブレーカースイッチのようなものに指をかける。

そして耳についたイヤホンタイプの装置の先端を口元まで伸ばすと。

おう、やっとか。待ちくたびれたぜ

「時間ぴつたりだから……いくよ」

躊躇いなく、そのスイッチを“OFF”に合わせると機材に表示された、接続エラーの文字。

それを確認して、会場を見上げる。

特に変化はないように見えるが　会場の一角。右端のAWAのロゴが消えていた。

「ごめんね」

言葉とは裏腹に、男の顔は微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2120u/>

Allegro Rhapsody

2012年1月10日22時45分発行